高田郡遺族会連合会

高田郡遺族会連合会の概況

一、創設当時の情況

高田郡遺族会連合会は、昭和三十年四月に吉田町に郡内十六地区（吉田・丹比・可愛・郷野・刈田・根野・横田・本村・北・生桑・船佐・来原・川根・甲立・小田・向原）の遺族会が結集して結成された。

二、主な役員

初代会長　三好清九郎　　二代会長　小島　倉七
三代会長　菅野　次郎　　四代会長　中村　忠省
五代会長　笹岡　芳枝

三、現在の役員

会　　長　奥田　久正　　副会長　笹岡　芳枝・重広　一之
婦人部長　森下シズノ　　事務局長　山本　照雄

四、会員情況

英霊柱数　二、三六〇柱　　婦人部　三〇四名　　壮年部　二二三名

○郡内遺族会再編成の現況

吉田町遺族連合会（吉田・丹比・可愛・郷野）
美土里町遺族連合会（横田・本郷・北・生桑）
高宮町遺族連合会（船佐・来原・川根）
八千代町遺族会・甲田町遺族会・向原町遺族会

五、活動情況

会費の徴収　婦人部　五千円、壮年部　千二百円、各遺族会は徴収しているが、金額は差違がある。町からの補助は全遺族会に少額有。

六、英霊顕彰

全町で、町又は社会福祉協議会主催で開催されているが、宗教色無しで実施される所もある。各遺族会に於ては会主催で、毎年仏式にて実施している。

郡としては、二年に一回、各町持廻りで、仏式により開催している。靖国団参については、約五年毎に郡全体で募集し、実施している。

七、遺族会研修等の行事

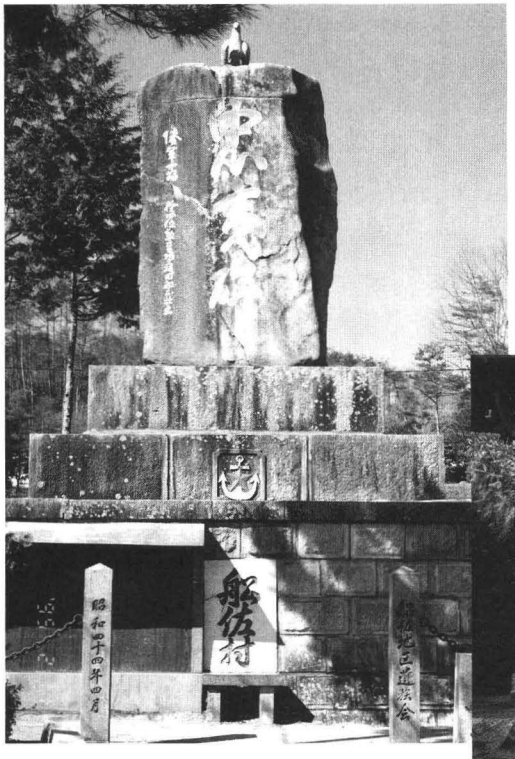
研修会は、吉田町内で毎年実施していたが、十四年前から、二年に一度、中国地方の護国神社参拝をとり入れた一泊研修会を実施している。

八、その他

各遺族会とも護国神社・忠魂碑・慰霊碑のいずれかが建立されている。明治に建立されたものもあるが、昭和が多く、戦後に建立されたものが大半である。

高田郡遺族役員研修会（於福泉坊、昭41．7．21）

向原町護国神社　平成２年元旦祭



高宮町
船佐地区忠魂碑

美土里町本郷　慰霊碑

母の苦労を誇ろぶ幼少の思い出

高田郡高宮町羽佐竹　秋　国　美恵子

父の思い出、残念ながら私には何一つ残ってはいません。いいえ何一つ覚えていないのです。私の父は昭和二十年二月三日応召され、同年八月九日中国の山西省半完懸曹家庄北方一料凹地附近に於て戦死したのです。享年三十三歳でした。私が三歳の時です。父と手をつないだことも抱いてもらったこともあったのでしょうが、父の手の温もりも、厚い胸の感触も私の記憶の中には何一つないのです。子供にとって父親というものが、どれだけ必要で、どれだけ影響を与えるものか何も知らずに育った私です。自分の子供を育て、子供達が家を出て行った今、静かに思うとき、片親で育った私は、自分の子供達に父親の存在がどれだけ大切かということを教えて来ただろうかと反省しております。

祖父が居ましたが、あまり身体が丈夫ではないのによく酒を呑み、何時も酔いつぶれて帰って来ては、又「酒を沸せ」と、母を困らせていましたが、そんな祖父の世話をしながら、母はがむしゃらに働きました。その姿を見て育った私は、自然に小さい時から自分に出来ることは何でも手伝って来ました。二歳年下の妹が炊事が出来るようになると、私は母について田んぼに出ました。小学生になった私は、農繁期には学校を休んで田んぼの手伝いをしなくてはなりません。祖父から、「父がいないのだから長女のおまえが母を助けて働かなくてはいけないのだ」と言い聞かされ、私もそれが当り前だと思っていました。早く大きくなって母を助けなくてはと思ったものです。中学生になると友達はみんなクラ

ブ活動に入部しました。私も誘われましたが、私には思いも及ばない事でした。

母は私を連れて、近所の農作業に雇ってもらいました。半人前の私を連れての雇れ仕事ですから、朝は皆さんより少し早く行き、夕方は少し遅くまで働くのです。田植に雇われれば、母は私の前まで手を伸ばして植えて行ってくれ、稲刈りに雇われれば私の前を一株、二株と刈って行ってくれました。母は牛で、田んぼを耕したり、稲はぜをしたり、小さい体で、男の人がする仕事も何でもやりました。そんな母を私は誇らしく思い、私も早く牛が使えるようになりたいと、祖父に牛の使い方を習い、少しでも出来るようになったときの嬉しかった事を覚えております。そんな生活の中でも父が居てくれたらと思った事はありませんでした。今にして思えば、それを思わせないほど母が苦労をしていてくれたのだと思うのです。小学校の入学式には母が自分の帯をほどいて、その帯芯で縫ってくれたランドセルを背負って、母が縫ってくれたワンピースを着て行きました。ランドセルの蓋には花の刺繍がしてありました。外で働いている母しか見た事のない私には、いつの間にランドセルを縫い、ワンピースを縫ってくれたのかと不思議な気がしたものでした。

戦争未亡人となり、文字どおりのいばらの道であったはずなのに、私達の前で愚痴、泣き言一つ云わない母でした。

私が遺族青年の集いに出させて頂き、初めて靖国神社へ父に会いに行かせてもらったとき、自分でも訳もわからなく体が震え、涙が止まらなかった事を、帰って母に報告したとき、母から初めて「何度死んでしまおうかと思い、幼い私達姉妹の手を引いて家の裏の溜め池の土手に立ったか知れない」と聞かされたのです。

歯を食いしばって生きて来たであろう母を、とてもいとおしく思い、大切にしなければと思っております。

母がここまで頑張って来られたのは、母の気持の中に、父は国の平和を願い、国の為戦死したのだ……という誇りが、又遺族会の同じ境遇の方々との励まし合いがあったからこそと感謝しております。

母にはこれからも、今までどおり厳しく私を見守って長生きをしてほしいと思っております。

残されて

高田郡向原町　笹岡芳枝

朝、玄関をそうじしていましたら「ピカッ」と光りました。庭へ出てみますと遥か広島の上空へむくむくと雲が上っていました。後でわかったのですがきのこ雲だったのです。原子爆弾だったのです。

昭和二十年八月六日、広島の街は焼野原と化し、多数の人命をうばわれました。私は幼児三人を連れて向原町の実家へ疎開しており、家の前を通る芸備線で帰ってくるはずの夫を待ち続けましたが帰りませんでした。数日後、夫が軍属で勤めていました中国配電会社より夫の被爆死の連絡を受けました。父と一緒に広島へ出かけ、駅前に茫然と立ちつくしました。住み馴れた広島は焦土と化し、何もありませんでした。外側だけ残りガランとした会社にたどりつき、遺骨を受けとりました。あのときの祭壇は今もまなうらにやきついています。分骨を鉄かぶとに入れずらりと幾段にも並べられ、ろうそくの灯がゆれていました。たくさんの

人骨をはじめて見た私は何とも言えない気がし、急いでそこを離れ、夫の骨を胸に抱いてこげ焦い焼野原をさまよい帰途についたのでした。

「戦争はむごいもの、戦争は絶対にしてはならない、二度とこんな思いを子や孫にさせたくない」と、つくづく思いました。

○夫の骨抱きて歩きし焦土顕つ比治山より見るビルの林に

私の人生第一巻は原爆で終わりました。とても幸せな二十七年でした。寡婦となり、人生第二巻のはじまりです。貨幣価値の変動、食糧難、衣料切符制等々、戦後の生活は大変でした。三人の遺児と生きていくために何をしたらよいかなやみました。専業主婦で仕事を持ったことのない私で商売も農業もできそうになく、結局経験はないけれど資格のある小学校教員を選びました。幸い採用になり子どもと共に小さな学校へ赴任し、勉強をしながら児童教育にはげみました。お母ちゃん先生の始まりです。一年半で町の大きな学校へ転勤し、児童教育に懸命にとりくみ教師として成長し、おとなしい主婦から意欲的な強い女教師に変ってゆきました。学年主任、教科主任、研究発表等ポストも与えられ、教職は私の生きがいとなっていました。

「過去にこだわらないで前を向いて歩こう。一日一日を大切に、明朗に過そう」と心に誓ってがんばりました。ぐちを言ったりめそめそするひまはありませんでした。おかげで高田郡初の女性教頭にもなり、充実した三〇年の教員生活を終えることができました。

退職後、人生第三巻を歩いている私です。子どもたちは、それぞれ家庭を持ち、二人の息子は教員をしていて私とよく話しが合います。子ども達に支えられながら趣味（短歌、旅行、園芸、ゲートボール等）を楽しんだり、遺族会、老人会のお世話等しながら平穏な日々を過ごしています。

あの日から五十年、長かったようにも短かったようにも思われ、悲喜織りなす過ぎゆきを静かにふり返り、老の深まりを感じながら生かされていることに感謝し、一日一日を大切に過ごしています。

○荒き世の過ぎゆきつぶさに語りたし夫の遺影は子よりも若き

○うつし世の縁薄かりし夫の墓守りつつひとりふるさとに老ゆ

○「母さんの生き方に拍手」と子等言うのを五十回忌の夫に告げたり